

かんの 菅野 よしあき 芳明

国際医療協力局
人材開発部 研修課
医師



★略 歴

- 2010年 東京大学医学部医学科卒業
国立国際医療研究センター病院 臨床研修医
- 2012年 国立国際医療研究センター病院 呼吸器内科レジデント
- 2014年 東京大学医学部附属病院 感染症内科 専門研修医
- 2015年 東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻 生体防御感染症学
(国立感染症研究所エイズ研究センター研究生) (医学博士)
- 2019年 東京大学医学部附属病院 感染症内科 助教
- 2020年9月 ロンドン大学衛生熱帯医学校
(熱帯医学国際保健学修士、熱帯医学衛生学ディプロマ)
- 2021年10月 国立国際医療研究センター 国際医療協力局 人材開発部研修課

★現在の主な担当業務

- 疾病対策チーム
- 2021年度 国際保健医療協力集中講座
- 2022年2月 東京都COVID-19医療機能強化型宿泊療養施設
- 2022年3月～ 東京都 COVID-19高齢者等医療支援型施設
- 2022年度 JICA課題別研修 薬剤耐性・医療関連感染管理
- 2022年度 国際臨床レジデント研修
- 2022年度 NCGMグローバルヘルスベーシックコース
- 2022年度 モンゴルにおける医師卒後研修強化プロジェクト

——— 菅野さんが、医師を目指したきっかけを教えてください。

両親をはじめ家族に医療従事者が多く話を聞く機会が多かったことや、理系科目が好きだったことで、将来の職業として医師を選択肢と考えやすかったと思います。また、ありきたりかもしれませんが、野口英世や北里柴三郎の伝記も影響しましたし、国境なき医師団や赤十字、ユニセフ等の広報、社会科学習等を通じて発展途上国の問題を知るたびに、世界の貧富・健康の格差に対して、自分にも何かできないかと考えていました。

医療と国際協力にはそのようにして関心があり、中学高校時の国境なき医師団のノーベル平和賞受賞やそれに関する報道、そしてミレニアム開発目標（MDGs）採択も国際医療協力をしたいという志を強くするものでした。保健医療分野のMDGには当時の世界の死因、疾病負荷の多くを占めた母子保健、感染症が取り挙げられ、これらは需要が大きいと考えました。中でも感染症は病原体という相手のはっきりした病気であり考えやすく、疾病負荷は大きいけれども医療が行き届けば多くは予防や治療ができるというところに、取り組みがいがあると感じました。

このような経緯で発展途上国に医療協力する医師になりたいと思うようになり、特に感染症対策には関心がありました。

——— 国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

医学部卒業後は国立国際医療研究センター（NCGM）病院で研修しました。国際保健、感染症に重点的に取り組んでいるセンターであり、私のような国際医療や公衆衛生を目指す人も想定しプライマリケア研修に重点を置いた総合診療科プログラムがあったので、こちらで研修しました。研修医1年目の1月に東日本大震災が起り、同年に東松島市にボランティアに行く機会もいただきました。

国際保健分野に進むにしても臨床医として一人前に働けるようになる必要があります。また、一つは専門分野を持っていたほうが良いと考えていたので、感染症が専門と言えるところまで勉強しようと決めました。2年間の初期研修後、大学の感染症内科に入局し、専門研修の一部として2年間はNCGM病院呼吸器内科で研修を受けました。感染症内科医の業務は他の診療科の医師から感染症診断・治療の相談を受けるコンサルテーション業務が多くを占めますが、初期研修修了時点では主担当医として患者さんを診療するトレーニングがまだ必要と考えたこと、また、多くの感染症の病巣となり、かつ主要な臓器である呼吸器について深く学ぶことが、呼吸器内科研修を決めた理由でした。NCGMには結核病棟があり結核の診療の経験を積むことも目的でした。東大病院感染症内科で感染症内科専門研修を継続し、HIV/AIDSの患者さんの診療や他の診療科に入院中の患者さんの感染症コンサルテーションを経験しました。

その後は大学院博士課程に進学しました。当時から感染症対策を通じた国際保健を考えていましたが、それが診療・研究・公衆衛生のいずれを通してでも結果につながるもの良いと思っており、多くの人の利益につながりうる研究を自分ができそうか試してみたいという思いがありました。研究テーマとしては未だ根治法や有効なワクチンのないHIV/AIDSにやりがいを感じ、国立感染症研究所エイズ研究センターでサルエイズモデルを用いた免疫不全ウイルスに対する免疫応答の研究を行いました。ウイルス学、免疫学の研究論文等を身近に感じ解釈できるようになったことは、今後にも生かせる収穫と考えています。研究は何らかの形で今後もできたらと思っておりますが、私としては臨床医のキャリアを活かして、感染症診療を通じた、そしてフィールドでの国際保健を主軸にやっていきたいと考えました。

国際保健分野で仕事をするのが自分に向いているか、やっていけそうかを確認したいという思いもあり、博士課程修了後は、以前よりタイミングをうかがっていた熱帯医学国際保健学留学をしました（London School of Hygiene & Tropical Medicineの修士課程）。このコースの魅力であった、低中所得国のフィールドへ渡航して研究する機会はCOVID-19の影響で失われましたが、国際保健分野ですでに働いている学生や先生方にも出会い、それまでなかなか身近に国際保健分野での医師のキャリアモデルが多くありませんでしたが、ここでの経験は私の国際医療協力で働こうという思いを後押しするものでした。



ロンドン留学時のクラスメイトと

**国際医療協力局に入職したきっかけ、理由を教えてください。
入職後はどのようなお仕事をされているのですか。**

感染症専門研修および熱帯医学国際保健学留学を終えたタイミングで、感染症関連の国際保健の仕事を始めたいと考えていました。病院勤務に戻ると国際医療協力が難しいため、留学を終えたこのタイミングが国際保健分野に挑戦する最適なチャンスと思い、新しい職場を考えていました。留学前に、国際医療協力に関するセミナーなどで国際医療協力局の先生のお話を伺う機会があり、協力局は私のやりたいことができる場所の一つと考えていました。協力局ホームページに紹介されている、世界での幅広い活動内容は自分の行いたいことに近く、また国際保健医療協力の豊富なご経験のある先生方を見習いステップアップしていけたらという期待をもって協力局に入職することに決めました。

2021年10月に入職しまだ日が浅いですが、これまで、国内外対象の様々な保健医療関連研修業務への参加や世界保健機関(WHO)の執行理事会や予防接種に関する戦略諮問委員会会議の傍聴の機会をいただき、勉強させていただいています。



モンゴルの地域での医師の育成を目指す総合診療研修の普及に向けた研修をオンラインで行いました



Global Health Diplomacy WorkshopでWHOの国際会議の模擬演習を行いました

——— 今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

現在は国内の新型コロナ対応業務にも携わっていますが、世界の新興再興感染症対策や医療関連感染対策等、これまでの感染症診療経験を活かせる活動をしていきたいと考えていて、JICAの国際緊急援助隊国際感染症チームやWHOのGlobal Outbreak Alert Response Network (GOARN) にも登録しています。発生してからの対応はもちろんですが、ワクチンや体制づくりなど予防面の活動にもかかわっていききたいと思っています。

また、感染症以外に母子保健や非感染性疾患、医療人材育成や保健システム構築などにも、勉強しながら関わっていききたいと思っています。

人々の健康改善という最終目標までには比較的時間がかかり、現場の人々から離れた場所での仕事が多いという点に、臨床との違いは感じますが、目標を常に意識して、意味のあるステップを残せるプロジェクトや研究をしていきたいと思っています。

——— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

グローバルヘルスはますます注目されている分野で、幅も広く、職種、課題分野、産学官民、いろいろな立場でのかかわり方があると思います。キャリアパスは多様である一方で、日本にはまだあまり国際医療協力をしている人は多くないので、なかなかぴったりのキャリアモデルには出会いにくいかもしれませんが、国際医療協力の興味のある方どなたにも、学業や経験が活かせる場所、自身に合うやり方が見つかると思います。私自身が昔感じていたハードルは今はないように思います。

私はこれまでに国内や留学先で多くの先生方にキャリアパスの相談をしたり、活動のお話を聞いたりして、選択を重ねて今に至ります。ぜひセミナーや研修に参加するなどして興味のあることを見聞、経験して国際医療協力を始めてみていただきたいと思います。

ぜひ世界の健康格差をなくす方向に向かって一緒に働けたらと思います。



——— ありがとうございました。